

社会移動と子どもの社会化

—達成動機の問題を中心にして—

山 村 賢 明

一

社会移動と子どもの社会化

社会移動ということばによって、人々が社会的地位の間を移動する現象を意味するとするならば、それが生起するためにはまず一定の社会における地位に、みたさるべき空席がなくてはならないであろう。社会的地位は、現代社会においては、大体職業的地位の威信によってきまる度合が大きいから、地位の空席は職業構造・構成の変化によってもたらさることが多いと考えてよい。例えば、工業化に伴う第一次産業の凋落と第三次産業の拡大、テクノロジーの発達や技術革新による専門的ホワイトカラーの職業の増大と非熟練労働の比重低下といった事態がある。当然そこには新しく生み出された空席をめぐって社会移動、とりわけ上昇移動がひきおこされる。また上層階級の出生率が低い場合には、その地位を自分の階層のみによって補充することができないため、そこに生ずる空席をめぐって、当然下からの移動が行われる

ことになる(1)。

しかしこのような空席をめぐる移動とは別に、というよりはそれと同時に、上昇移動と下降移動が引替えに行われるような社会移動がある。つまり競争によってその勝者が上昇し、敗者が下降するような場合であり、S・MリップセットとH・Lツェッターバークが「交替移動」interchange mobilityと呼んだものである(2)。この移動が一定の社会のなかで、広範に行われるためには、階層的地位の低いものにも、現に上層の地位を占めるものと張り合うだけの手段とチャンスが開かれていなければならない。例えば学校教育というものが誰れにでも解放されていて、そこにおけるアチーブメント次第で誰れでも高い職業的地位を獲得できるということが必要であり、結婚においても「家柄」などが重視されないと、企業の昇進制度が実力主義に基づくと、ということが条件となるであろう。この種の移動が、それぞれの社会のなかで、どのようなパターンをとるかは、その社会の文化によって深く規定

されている。R・H・ターナーの *Sponsored mobility and Contest mobility* は、その二つのタイプを巧みに提示している(3)。

しかしながら、社会移動が起るためには、より基本的には、社会の人々が移動しようという十分な意欲をいだいていなくてはならない。精神のなかにそのような傾性がある、それが行動様式として共有されていなくてはならない。職業を中心とする社会的地位に、明らかなランキングがあれば、水が低きにつくように、下降をさけ、上昇を求めて、社会移動が起ると考えては早計である。工業化の進んでいない未開社会の例をもちだすまでもなく、アメリカにおいて第二次大戦中兵役についた多くの人々は、将校に任官することを断った。彼らは将校になれば、収入が増え威信が高まることは明らかであったにもかかわらず、それに伴う新しい状況や友人や責任についてのリスクを受け入れようとしなかったのである(4)。つまり高い地位よりも、現在の低い地位に留ることを選ぶということも十分ありうるということである。

またT・ヴェブレンが考えたように、人間は普遍的な自我欲求に従って、自我を擁護するために一定の階級的地位を守り、自我を拡大させるためにその地位を上昇させる——というだけでは不十分である。たしかに個人は、社会の与える評価によって自分を評価するのが普通であるから、社会が高い消費水準を称揚すれば、個人も消費水準を極大化してみせることによって、自己の評価を最大化しようとするであろう。しかしそこで重要なことは、自己の評価をたかめようとする、自我の飽くなき欲望そのものなのではなく、それを方向づける特定の社会的規範があるということである。

ある。つまり、職業的地位を高めることによって社会移動を行い、その結果として自我の拡大がなされるべきである、という社会的圧力が働いているということである(5)。そのような規範が、社会のなかに「常識的知識」Commonsense Knowledge (A・シュッツ)としてあり、また個人々々に内面化されていてこそ、人々はごく自然のこととしてその社会的地位を守ろうとするし、また上昇移動すべく努めることが、生きているからにはあたりまえのことのようにも思い込んでいるのである。

要するに、社会移動という現象は、基本的に文化的現象であり、そのパーソナリティ的側面において、社会化 Socialization に支えられているということである。社会移動のこのような側面の研究は、日本においてはとくに未開拓な領域であるが、アメリカなどにおいては、mobility aspiration, occupational ambition (例えばR・L・シンプソン) achievement motivation (motive) (D・C・マックレランド) mobility motivation (リフセットとツェッターバーグ) occupational aspiration (J・T・エンペイ) など様々なタームで研究・調査が進められている。一般に社会移動の研究は、(一)移動の方向と距離の実態から、社会の開放性・流動性をはかるもの、(二)移動の過程を調べてそのパターンを導き出すもの、(三)移動の要因をさぐるもの、(四)移動の結果が個人や集団構造に与える影響を研究するもの、に大別することができる(6)。これに従っていえば、ここで取りあげようとするのは、(三)の領域に位置づけられるものであるが、ここでの力点は心理的側面というよりは、むしろ文化的側面におかれるであろう。

社会移動とこどもの社会化

二

社会移動をめぐる社会化の問題も、社会化の過程やメカニズムとして、とくに他の社会化の事象と異なるわけではない。そこで最初に、社会化の一般的過程をどのような枠組のなかで理解するかを、A・インケルスの最近の論文(7)を参考にしながら、私なりに示しておきたいと思う。

(1) いかなる社会化も一定の**社会構造**のなかにおいておこる。社会構造をどのように把握するかは、議論のわかれるところであるが、一応次の四つ次元に分けて考えられる。①生態学的側面∥人口の大きさ・密度・分布・構成・資源との関係など。②経済的側面∥物品やサービスの生産・配分の社会的様式、産業構造、経済的水準など。③政治的側面∥権力の形態・分布・発動の様式など。④価値体系∥社会化を方向づける諸価値、信念など文化の側面。しかしこれは、社会構造ときり離して、**文化的側面**として独立させてもよいであろう。

(2) 社会化は、そのような状況のなかにおいて、具体的には社会化するものとされるものとの関係として行われる。そこで社会化する方を**社会化のエージェント**とすれば、そのなかには、個人・社会集団、社会的組織や機関が含まれる。その主要な形態は、家族・仲間集団・学校・職業集団・マス・メディアなどであろう。準拠集団を提示して、予備的**社会化 anticipatory socialization**の機会を与えるのも、主としてこれらのエージェントを通してである。

(3) 社会化は広義には個人々々のライフ・サイクル全体にわたって行われるので、社会化されるものは、**発達段階**に依じて考えられなくてはならない。常識的ではあるが、①乳幼児期、②児童期、③青年期、④成人期、⑤老年期などに分けられる。より詳しくはパーソンズのいう「移行の位相」や、各段階を通じての男女の別が考慮されなくてはならないであろう。

(4) 一定の社会構造を背景として、社会化のエージェントによって、特定の発達段階にあるものに対して、文化の内面化としての**社会化の諸行為**がなされる。そこには、社会化するものもされるものも、共に直面される**具体的諸問題、issue**があり、社会化するものが課する**目標、objectives**と社会化されるものが達成しなくてはならない課題、**task**がある。両者が位置する社会的職業的階層によって社会化の**力点や方法**についての違いがみられるであろう。

(5) 以上が、人間が生まれてから老年になるまでの、日常生活のなかで行われる社会化の一般的枠組である。だからその社会化の過程には、人間の**社会生活**のあらゆる側面が含まれることになる。しかし社会化の実際の研究においては、その全面を扱うことは不可能であるから—文化人類学的研究が、その意味では最も広範にわたるといえるようが—、**社会生活や文化**のどの側面についての社会化をとくに問題とするのかを、明確にする必要が生じる。それは**社会化の主題**というべきものである。もちろん特定の主題にそって社会化をみるといっても、社会化の**一般的過程**と切り離すことは不可能であり、むしろ**一般的過程**のなかに位置づけなが

らみてゆくことになるであろう。しかし例えば日本人における金銭観とか、親子関係のあり方とか、法意識の問題とかいうように、主題を設定して社会化の過程を追求することが、社会化についての社会学的研究をより捻り多いものにするだろうと思うのである(8)。(ただしここでいう**主題は社会構造から文化的側面を独立させるなら、その中に位置づけることもできるであろう。**)

ところで、小論のテーマである、「社会移動と社会化」も、実はそのような性格の研究に属するものといえるのである。その主題は、今日の社会で、人々が社会的職業的に下降することを嫌い、ひたすら上昇しようとするのは、そしてまたその意欲において人々の間に差異が生ずるのは、どのような社会化によってもたらされるのか、ということである。ただ残念ながら、今日の研究段階では、先に提示したような社会化の一般的枠組の全体にわたって、それを解明することはできない。そこでここでは、ほんの二三の点について、従来の研究を検討するにすぎない。

三

第一に注目されるのは、ある種の欲望の満足を延期すること**が、社会移動とそのアスピレーションに關係している、という一連の研究である。**これはアメリカ社会において、下層階級の人々が衝動追隨的であるのにたいして、中流階級の人々は逆に欲望満足(または欲求充足)延期的である *deferred gratification* という形で、L・シェナイダーとS・リスガードによって提起されたものである(9)。それはその後何人かの研究者によって追試され、

理論的にも支持されてきているが、ここではその代表的なもの一つとして、M・A・シエトラウスの研究(10)をみてみよう。

彼は若者の欲求として、*affiliation, aggression, consumption, economic independence, sexual expression* の五つを選び、ウィスコンシン州の四つの高校の生徒三三八名について質問紙調査をした。質問は、例えば「攻撃性」についてみると、新しい学年が始ってから、何回位けんか *fights* したか、というような項目が四つずつ、計二〇問から成っている。

その結果として次のような点が明らかにされた。第一に、これら五ヶの欲求属性相互の間の相関は高く、単一次的である。つまり全体として欲望満足延期パターン(DGP)をつくっているということ。しかし、そのパターンは二つのクラスターから成っていると考えた方がよいということ。すなわち *affiliation, aggression, sex* が一つのクラスターをなすが、それは人間関係的欲求の延期を示すものであり、*consumption, economic independence* がもう一つのクラスターをなすが、それは物的欲求の延期をあらわすものと考えられる。

第二に *economic independence* の欲求の延期を除いて、若者の社会経済的地位とこのパターンとの間には積極的な相関はみられない。しかしながら第三に、欲望満足延期の傾向は若者たちのアチーブメントと有意な相関があることが見出された。アチーブメントを示すものとして、学校の成績と将来の職業についてのアスピレーションがとられた。学校の成績は若者たちの現在のアチーブメントであるが、必ずしもそれがそのまま後の実生活での

ループ間のアスピレーションの差は、統計的に有意ではないが、父親も本人も旧中間層である者のアスピレーションが最も高く、父親も本人も労働者層である場合に最も低く、移動グループのアスピレーションはその中間の値をとる。

このような結果から第二の点について、安田氏は次のように結論づける。「すなわち、欲望延期的なアスピレーションの持主が上昇移動する（欲望満足延期説）とか、下降移動した者が欲望延期的なアスピレーションをもつというよりは、欲望延期的なアスピレーションの高さなるものが、その所属階層によって規制されていると同時に、その出身階層によっても規制されているのであって、このために社会移動そのものがアスピレーションと直接関係あるかのごとくみあやまれていたのである」。

この論文をあぐっては、その後袖井孝子氏と安田氏との間に議論のやりとりがあったのであるが⁽¹³⁾ここでは社会化の観点から考えてみたい。

安田氏の第一の批判点、つまり欲望の延期ではなく禁止ないしは制限ではないか、という点に関しては、たしかにその通りなのかもしれない。しかし社会化という視角からみるならば、それを何と名づけるかはともかくとして、そのようなパターンがあるとということ自体が重要なことのように思われる。何故なら社会移動が一定の社会のなかで一般的にみられるというためには、パーソナリティの側の条件として、下降をさげ上昇しようとする傾性なり意欲なりが、どこかで形成されていなくてはならないからである。

もちろん、社会移動そのものは様々な現実的諸条件によって規定されて生起するものであるから、一定の精神的・心理的特性がそのまま社会移動をひきおこすというようなことは考えられない。問題は社会移動を促進するようなパーソナリティ要因として、移動への高いアスピレーションやモチベーションを形成するものは何か、ということである。シュトラウスなどの研究で、そのことが直接実証されているとはいえないであろうが、「欲望満足延期」はそのような理論的分脈のなかで理解するとき、なお検討されるべき積極的な意味をもっているのではなからうか。

その意味では、ライスマンとそれに依拠した安田氏の調査の枠組は、われわれの関心とはややズレたものになっている。たしかにそれは、字義通りには欲望満足の延期をねらってはいるが、そしてそれが直ちにアスピレーションの高さを意味するようになっていくという点では整合的ではあるが、移動への志向を支えるパーソナリティ要因、つまり社会化の側面からは遠ざかっている。研究として整合的であるのだから、そんなことは関係ないといっておかまわぬかもしれない。安田氏は成功のチャンスを設定したうえで、どれほどの欲望の延期をするかという質問に基づいてアスピレーションをつかみ、それが、所属・出身階層によって規制されているという事実から、移動そのものはアスピレーションと直接関係ないという結論を導き出したのであった。そこでは欲望満足の延期がそのままアスピレーションの高さを示すものとみなされていて、アスピレーションを支える条件が問われているのではない。しかし欲望満足延期の考えの中に、本来社会化という

社会移動と子どもの社会化

含意があったとするなら、それだけで欲望満足延期説を否定することは出来ないのではないだろうか。それは調査法がパネル法をとるかどうかという問題とは一応別個のことにように思われる。

このようなわれわれの関心からするなら、マックレランドたちの達成動機の研究が注目される。それは単に社会移動に留まらない、経済発展というような広い問題意識のもとで追求されているが、しかしそれを支えるパーソナリティ要因とその形成を、より直接的に問題としているからである。

四

近年アメリカの(社会)心理学において研究のめざましい「達成動機」(14)は、必ずしもその概念が一義的に明確なものではない。しかしごくおおまかに、「達成動機とは、困難なことをうまく成し遂げたい、競争事態で人よりすぐれた成績を得たい、すぐれた業績をあげたい、というようないわゆる何らかの価値目標にたいして、自己の力を発揮して障害に打ち克ち、できるだけよくその目標を成し遂げようとする動機または要求(15)」を意味するものと理解してよい。そしてそれは、プロジェクトヴ・テストによって、そこに表現された achievement imagery から測定されるものである。

これは当然、飢えとか性など生理的なものと異り、後天的社会的に形成されたものとしての二次的動機(動因)の一つであり一般には年少時の経験のなかにその起源をもち、それ以後比較的安定して持続する、潜在的な傾性と考えられている。マックレランド

はプロテスタンティズム↓資本主義の精神というM・ウェーヴァーの図式の中間に、この達成動機の形成という媒介項を挿入するようなかたちで、経済発展の説明を心理学的に精密化しようとしたわけである。その研究(16)は老成なものであるが、そのような傾性ないしは個人が個人に強くつくられているかどうかは、当然その人の社会移動にも影響を与えずにはおかないであろう。それは職業的アスピレーションなどより、もっと深いところにおいて、社会移動を規定する力となるようなものであるに違いない。

そこで、社会移動についてのマックレランドたちの研究(17)をみてみることにしよう。問題は高い達成動機をもつものが、はたして「上昇移動的」upwardly mobile であるか、ということである。

F・L・ストロトベックやB・C・ローゼン(18)は「良い男子」というものは、他地方での有利な職をあきらめてでも、両親の近くに住もうとするものだ」という質問にたいする賛成反対を調査している。ストロトベックによると、上昇移動的なユダヤの少年の方が、非上昇移動的なイタリアの少年よりも、その質問に反対するものが多い。同様にローゼンによると、より上昇移動的な上流プロテスタントの少年では、家を離れてもよいとするものが五割であるのに対して、下層階級の少年では二七％にすぎなかった。つまり社会移動は、家を離れることに結びついているわけであるが、それを達成動機の高さからみるとどうか。ローゼンの調査では、移動指向的なものうち高い達成動機のもの四二％、低い達成動機のもの三二％で、必ずしも有意な差はみられなかつ

たが、四ヶ国の実業家と専門職を対象とした他の調査では、達成動機の高さと、仕事のために家を離れる傾向との間に相関関係があることが実証されているという。またマックレランドは、自分自身のブラジル、インド、ドイツの少年達の調査のなかから、それを傍証するデータを示している。ハイ・クラスの *Selective School* に通っている学校の生徒のうち、親の教育程度の低い貧しい家族的背景からきている少年の方が達成動機得点が高いこと、更に宗教的背景からみてドイツやブラジルのカトリックの少年において高い達成動機がみられること、などが、上昇移動への指向との関連を示唆しているというのである。

さらにマックレランドは、職業についての *Aspiration* や選択についても、高い達成動機の持主は中位の危険性 *moderate risks* の作業を選ぶ、というアートキンソンの実験結果に基づいて、次のことを示した。すなわち達成動機の高い少年は、みずからの所属階層からみて中位のリスクを示すと思われる職業を好む。例えば日本やアメリカの中流階級の少年にとって、実業家的職業 *business occupation* は中程度の困難度をもつために、その階層で高い達成動機をもつ少年達は、工場経営者のような職業を選ぶが、上流階級の子どもたちは、むしろ科学研究者にひかれる、ということである。

マックレランドのこの書物が出された後、いくつかの研究が、社会移動と達成動機の関係について、もっと直接的な結果を明らかにしている。例えば H・J・クロケットはアメリカの男性につ

者は、上昇移動しなかった人達より高い達成動機得点をもつ、ということを示した(19)。また *Littig* と *Yeracalis* は男女の世代間の上昇・下降移動について、ランバートとクラインバーグは少年の *Aspiration* について(20)、それぞれ同様の調査結果を発表している。

もしそうだとするならば、このような達成動機は、先に問題とした欲望満足延期よりは、社会移動をより直接的に規定しているものと考えなければならぬ。何故なら、後者は人間を社会的地位の上昇に向わせる要因というよりは、むしろそこに相関的にみられる条件といった方がよいような間接的なものであったのにたいして、前者は最初からアチーブメントとしての社会移動にかりたてるパーソナリティ要因を問題にしているからである。しかも後者が社会化を含意しながらも **社会化の諸行為** を直接問題にしないのにたいして、後者は達成動機そのものにつくられ方(社会化)についての、理論的実証的研究を伴っているからである。

それは達成動機の発生起源を、家族のなかの幼少時の社会化経験に求めるのであるが、より具体的には「自立訓練—達成仮説」 *independence training-and-achievement hypothesis*(21) というものに依拠している。この面での先駆的実証研究(22)は、M・R・ウインターボトムによって行われ、その後のマックレランドその他の諸研究も、基本的には彼女のアイデアを踏襲し確認しているのである。

彼女は、マックレランドの理論を発展させ、幼少時の自立訓練

社会移動と子どもの社会化

強弱に関係あると考えて、アメリカ中西部の中流階級の男の子二十九名（年令八一〇才）とその母親について、次のような調査を行った。まず子どもにT・A・Tを行い達成動機の高いものと低いもの各一〇名を選びだした。次にその母親たちに面接して、例えば「他の子どもたちをリードでき、子どもの集団のなかで自己を主張することができる」「自分で服をぬぎベッドに行くことができる」「家の留守番のとき泣いたりしない」というような項目ごとに、自分の息子に何才頃までにそういうことをしつづけたいかを質問した。

その結果明らかにされたのは次のようなことである。高い達成動機の子どもの母親は、低い子の母に比べたとき、より早期に独立行 *self-reliant mastery* を期待する。しかも彼女たちは子どもにより少なく制限を課するが、それもより早期に行われる。他方低い達成動機の子どもの母親は、より多くの制限を課し、早期に自立性を要求することが少く、より長期間大人への依存を許すというのである。

このウィンターボットムの研究に基づいて、達成動機を形成する社会化のあり方の追求がなされた。B・C・ローゼンは、アメリカの様々な人種・階級的差異を考慮できるように調査対象を広げることにより、マックレランドはブラジル・日本・独乙などとの国際比較をすることによって、またローゼンと D'Andrade は積木という実験的場面で両親と子どもを観察することによってそれぞれウィンターボットムの調査結果を修正し深めた。マックレランドはそれらを要約して(23)、高い達成動機をうみ出すのに

はいくつかの次元について、中程度の moderate 社会化の圧力が働く必要がある、と述べている。つまり極端 extremes は達成動機を発達させないということである。第一の極端は父親の支配であり、父親がすべて決定してしまつては、子どもが自ら高い基準を設定することが少くなる。第二の極端は子どもにたいする甘やかし indulgent の態度と、子どもに示す卓越基準の低さである。

そして第三の極端は、あまりに早期の達成要求である。そこでは子どもは、飛べないうちに巢から追い立てられるようなものである。(三ヶ国比較において、日本の子どもは平均して独乙、ブラジルより達成動機得点は高いが、しかしよくみると、ブラジルのように早く自立的達成を要求した親と、ドイツのように遅くそれを要求した親の場合、その子どもの達成動機得点は低くなっている。そして一般的にその最も適切な時期は、五—一〇才とされている。)これらの極端の中間にこそ妥当な高さの卓越基準があるのであり、それが子どもが成就できる時に与えられ、干渉なしにそれを子どもが成就させ、子どもの達成にたいしては過保護や甘やかしということではなく本心に情動的よろこび(「温かさ」 warmth)を示す—ということが肝心だというわけである。

五

もちろん社会化との関連における達成動機の研究は以上でつきるものではない。マックレランド以後も多くの研究が発表されているし、われわれが主として眺めてきたのは、社会化のエージェントとしては家族における両親にすぎないが、学校教育(教科書

や成績など)や仲間集団をあつかった研究も出されている。しかしここでは、それらに立入ることを避け、むしろ、マックレランドに代表される研究のもっている問題点を検討する必要があるように思う。

マックレランドたちの達成動機も含めて、より包括的にアチーブメントと社会化の問題を吟味しているのは、E・ツイグラールとI・L・チャイルドである(24)。彼らは、アチーブメントの問題は少くとも三つの異なった水準で論じられていてと考える。一つは達成動機のようにもっぱらファンタジーのなかに求められたアチーブメントであり、二つは本人によって語られたアチーブメント指向行動ないし動機づけであり、三つめは具体的な様々なタイプのアチーブメントそのものである。これらのアチーブメント相互の関係は不確定であり、ましてやそれらを規定する先行条件(変数)を、例えば自立性というような単一の要因に求めることは困難であると、彼らは考える。

とくにこの後者の点について、彼らは次のような点に注意を喚起する。(1)アチーブメントへの努力は、単に自立的反応の一つの種類であるにすぎない。完全に自立的である多くの行為でも少しもある種の基準の達成に向わないようなものがある。(2)幼少時の明らかな依存行動は、発達によって単に自立的行為だけに道をゆずるだけではなく、もっと微妙な依存とか、弱者の養護とか、対等者間の協働とか様々な行為に進んでゆく。(3)依存性それ自体が、例えばきょうだいが親の配慮をできるだけ得ようと競うように、アチーブメントへの努力の主要な目標になることもありう

る。(4)アチーブメントへの努力のねらいが、本人自身によるのではなく他者による承認ということであるときには、そのようなアチーブメントに指向する大人は、(幼児とはちがった成熟した仕方ではあるが)やはり依存的である。

彼らはこのような観点から、必ずしもマックレランドたちの研究成果とは一致しない研究も含めて、多くの研究を紹介し検討している。そして、アチーブメント指向的行動が、達成動機以外からももたらされること、アチーブメントと依存性は同一次元上で反対の極に位置するものでないこと、許容—制限や親の温さと達成動機との間の関係には、必ずしも一貫性がないこと、高い達成動機は一般的な自立訓練よりも、むしろ直接的な達成訓練 *achievement training* と関係していること、アチーブメントへの努力の発達は、それになりたい社会的支持・承認があるかないかによって、また個人の過去におけるそのような努力の成功失敗のパターンによって影響されることなどを示唆している。

また、これとは別の視点からではあるが、D・ロートンなどの批判も出されている(25)。彼はマックレランドの研究に多大の関心を寄せながらも、(1)達成動機概念の使い方があいまいであること(2)達成動機というような単一の要因から、多くのことを説明しすぎること、(3)そのアプローチがあまりに心理学的であって、社会構造を十分考慮していないこと、などを衝いている。

六

このようなマックレランドたちの研究にたいする批判の多く

社会移動と子どもの社会化

は、多分当たっているにちがいない。しかしだからといって、社会的経済的現象をパーソナリティ要因を媒介させることによって説明しようとする、彼らの野心的試みの意義は否定できないであろう。とくに社会移動を社会化の側面から眺めるといわれるのテーマにとって、それは重要な研究である。ただ社会化という観点から、どうしても問題にされなくてはならないのは、彼らの研究における文化的要因の位置づけである。マックレランドの研究が、「文化的被拘束性」の問題を無視しているわけではないことは確かである。しかし達成動機という心理的メカニズムのもつ一般性のおかげに、それ自体がアメリカの社会と文化によって規定されているのではないか、という根本的問題がつきつめられていないように思える。一定の社会、文化を内面化することによる子どもの発達、という意味での社会化の観点が弱いといつてよい。

そういう意味ではたしかに彼らの研究結果は、アメリカ社会において、とくにその中流階級に関して適合的なのである。丁度欲望満足延期の事実が、アメリカの中流階級に最も典型的に見られるとされたのと同じように、達成動機もアメリカの中流階級において、最も高いという結果が出されている(26)。自立訓練達成仮説にしても同様である。自立訓練―達成動機と欲望満足の延期がどのように結びついているかという、実証的研究はほとんどないようであるが、「競争移動」のなかで上昇移動という卓越基準を自立的に達成するために、欲望満足の「延期」(禁止または制限を含めて)が要求されざるをえないことは論理的に推測できないことではない。

しかしマックレランドたちの調査をみても、他の国においてもアメリカにおける同じような結果が現われているとは限らない。例えば日本の社会階層別の達成動機をみると、労働者階級の子どもの得点が非常に高いのである(27)。そして日本においては、他の国とちがって母親による子どもにたいする達成要求の時期と子どもの達成動機の高さとの間の相関はゼロであり(28)、日本では教科書は達成動機を少ししか含まないが、学生達の達成動機は高い(29)というような結果にもなっている。もちろん国際的比較研究の困難さもある。そしてその一貫性の欠如を説明する努力から若干の理論的精密化も行われている。しかし、それにしても、マックレランドたちのアメリカ社会を基礎にした予想とのくいちがいと、それについての説明上の無理が目につくのである。

このことは、マックレランドたちの研究の枠組を基礎にして、日本で行われたそれと類似の調査をみると、さらに明瞭になる。そのような研究の数は少ないが、その一つとして林保氏たちのものがある。それは前述のウインターボトムの調査とほとんどまったく同じデザインで、京都市で行われたものであるが、その結果はまったく逆であった。つまり達成動機の低い子ども達の母親の方が、高い子ども達の母親よりも、早くからより多くの自立要求や制限を、子どもに与え、かつ自分の子どもを他の子より高く評価しているのである(30)。

また東京教育大学の社会学研究室で行われた東京での研究(31)を見ても、それほど明確な結果が出ていないわけではない。前掲の京都の調査が達成動機をT・A・Tで測定しているのにたいし

て、ここではそのもう一つの測定法としての洞察テスト insight-test によっている。それでも達成動機の高さと階層や躰との関係、「成功者」の自叙伝によってみた親の達成要求などについて、マックレランドたちの結果とあまり一致してはいないのである。

以上のような点から考えると、アチーヴメントそのものではなく、それをもたらすばねとしての達成動機という概念それ自体の文化的意味が問題となるであろう。達成動機測定の基礎となる achievement imagery は、ある卓越基準をもった競争のなかで成功するという願望、つまりある人が自分で自分に卓越した基準を課し、長期間の努力によって、成功を示すためのユニークな達成を行うというような表現がみられるかどうかによって判定される(32)。しかしそれが、その後の実験的研究結果などから敷衍されて、達成動機というものは、個人が自分自身で設定した高い基準を成功的に達成することだけに努め、またそのこと自体に満足を見出すものであって、その時の状況が提供するような外的刺激、例えば気に入られるとかお金をもうけるとかいうようなことに期待をかけるものではない、と規定されるようになる(33)。そしてさらには、そのような特徴を最もよく備えたのが実業家的行動 entrepreneurial behavior であるから、高い達成動機をもった者は、そのような職業をも好むようになると考えられるのである。

そうなること明らかにそこにはアメリカ的文化が反映していると
いわなくてはならない。そのような達成動機に基づく行動が一般

的に可能となるためには、第一に、それを積極的に評価し承認する文化が社会的背景として存在しなくてはならない。そうでなくては人間の社会的活動は、ロートンもいうように「真空」のなかで行われることになるからである。第二に、個々人のなかにそのような文化が、社会化の過程によって内面化されていなくてはならない。つまりそれは、ウインターボットムたちが取りあげたような**社会化のエイジェントと社会化の諸行為**以前の、社会化を方向づけものとしての社会構造のなかの価値体系ないしは**文化的側面**の問題である。

第一の点についていえば、日本の社会のなかには、アチーヴメントは「成功」として強調されても、その仕方についてのそのような評価の仕方が確立しているとはいえない。例えば、われわれの社会において、何かの業績を達成したときにいわれる一般的な表現は、それは誰々の「おかげ」だということである。私自身の調査によれば(34)、それはとくに母親のおかげであり、母を幸せにしてやるためにアチーヴメントに向って努力し、母の力に支えられてその挫折や困難を乗り切ったということである。このような、母親が子どものアチーヴメントの動機になるという「事実」は、「動機のなかの母」として、日本の母のコンセプションの一つの重要な構成要素となっているのである。ここで重要なことは、そのような関係づけが日本の社会のなかで公言され、しかもそれが一種の美談として社会的に評価されるということである。それは個人主義とは異った、いわば「他者包絡的志向(35)」ともいふべきものである。そこには自己に課した卓越基準を自らの

社会移動と子どもの社会化

力に恃のんで達成することそれ自体に意義を見出し、そのようなアチーブメントこそ社会的に評価されるという社会的規範は稀薄である。

第二の点も、このことと無関係ではないであろう。ウインターボットムと逆の結果が出たことも、様々な理由が考えられるであろうが、やはり基本的には文化の違いと考えるてはならない。日本においても自立訓練があることは当然であるが、それは素直さ・従順さの強調、甘えの許容というようなパターンの中で行われることである。オーヴァートな強力な自己主張は、「達成動機」を色どる基本的な特徴とみなせるが、それを控える「消極的な社会化⁽³⁶⁾」と甘え的な依存の人間関係⁽³⁷⁾に基づく社会化のもとは、自立訓練はそのまま達成動機と結びつかないのは当然ともいえる。ということは日本の社会では、自立訓練に基づかない(つまりある種の依存による)高い達成動機とアチーブメントが可能となっていることを示唆するものであり、自立訓練→達成動機→アチーブメント(又は社会移動)という図式を成立させている社会・文化的条件とは違ったそれがあるにちがいないということである。そしてまた同じプロジェクト・テストによって測定された達成動機でも、その社会化的文化的内実は社会によって違うかもしれないということもある。(日本において労働者階級の達成動機得点が高い、ということは、そのことに関係があるのではないか)。

さて、紙数がなくなってしまうが、このように考えてくると、アチーブメントや社会移動の動因となる動機とその形成にたい

し、もっと別なアプローチが必要になってくるであろう。C・W・ミルズによると、動機の研究には二つのタイプがある⁽³⁸⁾。一つは行動を推測された抽象的な「動機」に関連づけて説明しようとするもので、その際の動機は個人の心的構造 *psychic structure* のなかに位置づけられた要素^{||}ばねとして理解する。もう一つは、一定の社会的状況における動機の帰属や公言について、外から観察可能な言語的メカニズムを分析するものである。それは社会的関係のなかで、他者の期待との関係で役割行動を行う人間 *person* の水準での研究である。それは前者のように動機を心的要素の水準でみるのではなく、説明されるべき社会的現実としておさえる。このような類別はさきのツィグラータたちによっても行われていたものと似ているが、いうまでもなくマックレランドたちの研究は、第一のタイプに属するものである。そして第二のタイプの研究は、一般には *symbolic interactionist* によって行われるものである。そこでは動機は、社会的状況における他者や自己によって発せられる「何故」という疑問にたいする回答として把握される。そしてそれを伝えるのはコトバであるから、動機は動機のポキ、キャビュ、ラリーとして存在することになる。そのような動機は概して「事後説明」となり他者によって承認されやすいようなものになるが、それは単なる合理化として片づけられてはならない。それは行為の理由を説明することによって社会的行動を統合し、個人の行動を成功させる統制的条件となる。動機のポキ、キャビュ、ラリーは歴史・社会的に制約されているばかりか、動機は社会化の過程において、自らによって見出される前に他者によって課せられ、そ

れが個人によって内面化されてはじめて機能するものである。つまりわれわれは適切な動機とはどんなものであるかを学ぶということなのだ。

このような社会学的観点を導入することによって、われわれが問題としてきたような心理学的「達成動機」の研究がもっている弱点を補うことができる。それによってこそ、小論の冒頭に述べた、上昇移動を当然のこととするような社会の常識的観念を文化の問題として分析し、それらのアチーブメントをもたらす心的力(「達成動機」)を具体的に発動させる社会文化的条件を明らかにし、アチーブメントの方向としての達成価値 achievement values をも含めた社会化のあり方を、よりの確につかむことができぬとしない。

(埼玉大学)

〔注〕

(1) Havighurst, R. J., "Education and Social Mobility in Four Societies," in Halsey, A. H. et al. Eds, *Education, Economy, and Society*, 1961. pp.105~120. Lipset, S. M. and H. L. Zetterberg, "A Theory of Social Mobility" in BendixR., and S. M. Lipset (Eds), *Class, Status and Power*, 1963, pp. 561-573

(2) Lipset and Zetterberg, op. cit.

(3) Turner, R. H. "Modes of Social Ascent through Edu-

cation; Sponsored and Contest Mobility" in Halsey et al, op. cit. pp. 121~139.

このターナーの二つの理念型は大変興味深いものではあるが、日本社会の移動のパターンはそのいずれによっても十分説明することはできないであろう。日本のそれがどのようなものであるか、ターナーの考え方との対比において別の機会に明らかにしてみたいと思う。

(4) Broom, L. and P. Selznick, *Sociology*, 1963 p. 209.

(5) cf. Lipset and Zetterberg, op.cit:pp. 565~567

(6) 袖井孝子「社会移動とマスプレーション」安田論文への疑問「社会学評論六五号 一九六六年

(7) Inkeles, "Social Structure and Socialization," in Goslin D. A., (ed.) *Handbook of Socialization Theory and Research*, 1969. pp. 615~632.

(8) このことは、以前にも指摘したことがある。拙稿「社会化と家族研究の方法をめぐって」教育社会学研究第二集一九六六年

(9) Schneider, L. and S. Lyssgaard, "The Deferred Gratification Pattern: A Preliminary Study." *A. S. R.*, 18 (April. 1953) pp. 142~149.

(10) Straus, M. A., "Deferred Gratification, Social Class, and the Achievement Syndrome," *A. S. R.*, 27 (June 1962) pp. 326~335

(11) 『社会学』、リビダ、R・Q・ローマンの用語に於いて

社会移動と子どもの社会化

- “Achievement syndrome” と呼ばれている。
- (12) 安田三郎「社会移動に関する欲望満足延期説の検討」社会学評論 六〇号、一九六五年二—一三頁。
- (13) 袖井孝子「社会移動とアスピレーション—安田論文への疑問」安田三郎「袖井氏に答える」社会学評論 六五号 一九六六年一〇—一〇八頁
- (14) これについての原語としては achievement motive, achievement motivation, need for achievement, achievement など様々な類似語が用いられており、その間に少しずつ意味の違いがあるが、ここでは、特別の場合を除いては便宜的に「達成動機」という訳語で代表させることにする。
- (15) これは H・A・マレー、マックレランド、J・W・ブトキソンなどの研究を検討した林保氏たちがまとめたものである。林保編者『達成動機の理論と実際』誠信書房 一九六七年二二頁。
- (16) McClelland, D. C., *The Achieving Society*, 1961
- (17) McClelland, op. cit. pp. 317~322.
- (18) Strodbeck, F. L., “Jewish and Italian immigration and Subsequent Status Mobility,” “Family Interaction, Value s, and Achievement” in D. C. McClelland et al., *Talent and Society*. 1958.
- Rosen B. C. and D’Andrade, R. G., “The Psychological Origin of Achievement Motivation,” *Sociometry*, 1959, 22, pp. 185~218
- (19) Crockett, H. J. Jr., “The Achievement Motive and Differential Occupational Mobility in the United States,” *A. S. R.*, 27, 1962. pp. 191~204
- (20) Littig, W. W. and C. A. Yercatis, “Achievement motivation and Intergenerational Occupational Mobility,” *J. Pers. Soc. Psychol.*, 1. 1965 pp. 286~388 ; Lambert, W. E. and O. Klineberg. “Cultural Comparisons of Boys, Occupational Aspiration,” *Brit. J. Soc. Clin. Psychol.*, 2. 1963 pp. 56~65
- (21) Zigler, E., and I. L. Child. “Socialization” in G. Lindzey and E. Aronson. (Eds.), *The Handbook of Social Psychology* (rev. ed.) Vol. III 1969. pp. 450~589 esp. p. 550
- (22) Winterbottom. M. R., “The Relation of Need for Achievement to Learning Experiences in Independence and Mastery,” in J. W. Atkinson (Ed.), *Motives in Fantasy, Action, and Society*, 958. pp. 453~478
- (23) McClelland, op. cit. p. 356. ハリウッドの移民と移民の成功に関する研究は次のとおりである。Rosen, B. C., “Race, Ethnicity and the Achievement Syndrome,” *A. S. R.*, 1959 24. pp. 47~60
- Rosen. B. C. and R. G. D’ Andrade, “The Psychological Origin of Achievement Motivation,” *Sociometry*, 1959, 22, pp. 185~218

- 22, 1959, pp. 185~218.
- (24) Zigler, E. and I. E. Child, op. cit.
- (25) Lawton, D., *Social Class, Language and Education*, 1968, pp. 16~18
- (26) 上流階級五・六九、下層階級三・七八にたいして中流階級は六・三四、McClelland, op. cit. p. 362, Table 9.7
- (27) 調査のやり方によっては一位であったり二位であったりする。McClelland, op. cit., p. 379, Table 9.10.
- (28) McClelland, op. cit. p. 346, Table 9.2.
- (29) McClelland, op. cit. p. 77, Table 3.3
- (30) 林保編著、前掲書一〇六~一〇八頁
- (31) 東京教育大学文学部社会学研究室、昭和四二年度調査実習報告書『アチーブメント・モチベーションの研究』一九六九年
- (32) McClelland, D. C. et al., *The Achievement Motive*, 1953, pp. 110~114
- (33) McClelland, *Achieving Society*, pp. 44~46, 235, 239~240 etc.
- (34) 具体的には拙稿「“知名人”にみる日本の母のコンセプション」社会学評論六五号 一九六六年 を参照されたい。
- (35) 拙稿「集団の情動的側面と母子関係」社会学評論 七六号 一九六六年を参照されたい。
- (36) 拙稿「親子関係と子ども社会化—文化の観点から」教育社会学研究一九集 一九六四年

(37) 注(35)をみよ。

(38) 以下については次を参照されたい。Mills, C. W., "Situational actions and vocabularies of motives," *A. S. R.*, 1940, pp. 904~913; Gerth, H. and C. W. Mills, "The Sociology of Motivation," in Ditto, *Character and Social Structure*, 1954. Chap. V.

附記

本研究は昭和四三年度文部省科学研究費(試験研究)に基づく研究「アチーブメント・モチベーションの社会学的研究」(代表者安田三郎)のうち山村が分担した部分一部である。しかし学園紛争のため、直接あたることができなかった重要な文献がいくつかあることをお断りしておく。